

姉と私も心にしまつていたこと

諫山 こころ

私は十八歳の姉がいます。私は十三歳で、中学二年生です。姉は、生まれつき知的障がいがあります。言葉を話すことができず、人の気持ちを読み取ることも苦手です。自分でトイレに行くこともできないので、いつもおむつで過ごしています。私には小さいころの記憶があまりありません。写真を見ると、姉と一緒に笑っている場面もあるのに、「その時何を考えていたのか」「どんな気持ちだったのか」が思い出せません。姉が話さないことについても、それを「どうしてだろう?」と考える前に、いつの間にか「私のお姉ちゃんは喋らない」ということが当たり前になっていました。もしかしたら、私は小さいころから、いろいろなことを無意識に我慢して、心の中にし

まつてきたのかもしれません。だから記憶がはつきりしないのかなと思うことがあります。

姉は、ずっと支援学校に通っていました。小学校も、中学校も、そして高校も同じ学校です。私は違つて、小学校は地元の公立小学校に行つて、中学からは受験をして、私立の学校に通っています。学校では、誰にも姉のことを詳しく話したことはありません。聞かれたら、「いるよ」とは言いますが、「どんなお姉ちゃんなの?」と聞かれると、いつも困つてしまい、うまく答えられません。「変な子だつて思われたらどうしよう」「気を遣われるのが嫌だ」、そんなふうに思つて、心の中にしまい込んできました。

姉には、てんかんの持病もあります。発作を起こしたのは、これまでに何度かだけで、もう家族は対処の仕方を分かつていてるので、救急車を呼ぶことはありませんでした。それでも、やつぱり姉が発作を起こすと、家の中がざわついて、空気がピリッと張り詰めます。私も「何かしなきや」と思うのですが、体が動かず結局何もできないままに終わるのです。そんなふうに、姉には日常の中で手がかかることが多く、自然と、家族みんなの意識が姉に向くようになつていきました。私は、姉の着替えを手伝つたり、食べるのを見張つていったり、面倒をみることが当たり前になつていきました。いつの間にか、私のことは「ちゃんとしてるから大丈夫」と思われている気がして、親もあまりかまつてくれなくなりました。家族の中で、私の存在はどんどん薄くなつていくように感じて、「私は何のために生きているんだろう」と、ふと考えることが増えていきました。

姉と出かける時、私は時々周りの視線が怖くなります。姉は急に立ち止まり、見ず知らずの人のものを触つてしまつたりします。その度に、周りの人たちはじつとこっちを見できます。「なんだろう」「変な子がいる」と言つてゐるようと思えて、私は睨んでしまいます。子供に、「あの人、なんでああの?」と指をさされたこともあります。その子のお母さんが、「見ちゃだめよ!」と小さい声で言つた時、私の心にグサッと何かが刺さるような気がしました。「お姉ちゃんって、見ちゃいけない存在なの?」と、悔しさと悲しさでいっぱいになりました。正直に言えば、「お姉ちゃんなんかいなければよかつた」と思つたこともあります。面倒を見る事もなくなるし、お姉ちゃんばかりの生活から抜け出せると思つたからです。どうして、私ばかり我慢しないといけないんだろう。どうして、お姉ちゃんは普通じゃないんだろう。そんな気持ちが、何度も私の中に出てきました。だけど、そんなふうに思つてしまつた後は、いつも心の中でこう言い聞かせていました。「お姉ちゃんがいなかつたら、私も生まれていなかつたかもしれない」「お姉ちゃんと一緒に生きていたから、今の私がいるんだ」。

それでも、辛いときはやっぱりあります。そういう気持ちを、誰かに話したいという気持ちもあります。だけど、口にしようとするとき、涙が出てきて、言葉になりません。どうせ言つても、分かってくれないかもしれない。そんなふうに思つて、ずっと一人で抱えてきました。

友達が話している時、「～障害じやん」と誰かが笑いながら言つてゐることがあります。私は笑

えません。「障害はそんな軽いものじゃないのに」と思つてゐるからです。でも、その場の空気を壊したくなくてつい一緒に笑つてしまします。あとで自分を責めて、家で一人で泣いてしまうこともあります。「私なんで笑つたんだろう」つて。家族で障害のことが話題に出ると、涙が止まらなくなることもあります。理由は自分でも分かりません。でも多分、ふだん普段我慢しているいろんな気持ちが、そこで一気に込み上げてくるのだと思います。

私は、お姉ちゃんと一緒にいることで、他の人とは違う経験をたくさんしてきました。きっと、これからも姉のことで悩んだり、迷ったり、泣いたりすると思います。でも、それと同じくらい、姉からもうあたたかさや、笑顔や、気づきもあるんだと思います。以前の私は、姉と自分を比べて、「なんでお姉ちゃんばかり」と思うこともありました。でも今は、少しだけ気づけるようになつてきました。姉は姉なりに毎日頑張つてること、そして、私も私なりにできることがあるということ。姉がいてくれるからこそ、私は“誰かの痛みに気づける人”でいたいと思えるようになつた気がします。

友達に姉のことを話すのは、まだ少し勇気がります。でも、いつか話せる日が来るかもしれません。そんなとき、「こんなふうに思つてきたんだ」と自分の気持ちをちゃんと伝えられたらいいなと思います。きっとそれは、姉のことを守ることにも、自分自身を大事にすることにもつながつていく氣がするからです。“障がい”は、目に見えるものだけじゃなく、心の中にもたくさんあります。

姉と過ごしてきたことで、私はそのことにも少しづつ気づけるようになりました。完璧じゃなくていい。分からぬままでもいい。でも、知ろうとする気持ち、寄り添おうとする気持ちを、これらも大切にしていきたいです。

これから先も、姉と私の関係はずっと続いていきます。大変なこともあるし、逃げたくなることもあるかもしれません。でも私は、姉の妹として生まれたことに、意味があるような気がしています。そして、少しずつでもいいから、姉のそばで、姉と一緒に「生きていく」ということを、自分なりの形で大切にしていきたいと思っています。

諫山 こうろ

二〇一一年生まれ
埼玉県在住



【受賞のことば】

このたびは素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。私は、この応募をきっかけに、初めて障害のある姉について書き、自分の中だけにしまっていた葛藤と向き合いました。言葉にすることで、これまで気づけなかつた自分の思いを知ることができたように感じます。今回の経験を機に、これからは自分に正直に、嘘をつかずに生きていきたいと思います。

選評

一般的に、障害のある兄弟姉妹がいるいわゆる「きょうだい児」は、多くの気遣いや葛藤を抱えながら成長すると言われています。時にはきれいごとだけでは済まないことがあるでしょう。本作品は、十代の諫山さんの複雑な心の内や変化がありのままに綴られており、その内容もさることながら、表現力にも圧倒され、心を揺さぶられました。これからも、唯一無二の「姉妹」としてお姉さんとの大切な時間を過ごしていただければと思います。

(加藤 宏昭)